

『ドン・カズムツホ』とイスパノアメリカ文学

マシャード・ジ・アシス著、武田千香訳

『ドン・カズムツホ』

光文社古典新訳文庫 二〇一四年二月

ブラジルとスペイン語圏アメリカ（以下、イスパノアメリカ）は多くの点で隣接しているはずだが、実際のところ、どのような照応、交錯、切断があるのだろうか。ブラジル文学の最高傑作のひとつとされるマシャード・ジ・アシスの『ドン・カズムツホ』を読んで考えてみた。

マシャードと同年代の作家でイスパノアメリカの作家を挙げるとなると、ホセ・マルティ（キューバ）だろうか。それとも、マシャードの蔵書のなかに本が見つかったルベン・ダリーオ（ニカラグア）だろうか。実際、ダリーオとマシャードは一九〇六年にリオ・デ・ジャネイロで遭遇している。

火と生命と愛のかのブラジルで見た優美な翁

謙遜と機知そのもの。

インドの高貴をたたえる褐色

中国人のような風貌、ギリシャの賢人を思わせる弁舌。

Dulce anciano que vi, en su Brasil de fuego

y de vida y de amor, todo modestia y gracia.

Moreno que de la India tuvo su aristocracia;

aspecto mandarino, lengua de sabio griego.¹⁾

「マシャード・ジ・アシスに」と題された詩の一連はこのようにマシャードの人柄をたたえた内容である。スペイン語作家とポルトガル語作家のあいだに濃厚な接触があったことが確かめられる。

マルティ、ダリーオはともにイスパノアメリカ文学にこれまでになく新風を注ぎ込んだ。その旗印は脱亜入欧ならぬ、脱西入仏である。モデルニスモ作家としてその後、この二人は文学史にその名をとどめることになるが、彼らの活動した領域は小説、しかも『ドン・カズムツホ』のような長篇小説ではなく、詩や散文だった。

カルロス・フェンテス（メキシコ）によれば、十九世紀のイスパノアメリカ小説は不毛で、その時代の言論を牽引したのは国民的アイデンティティの捻出に打ち込んだ歴史家、思想家、教育者たちだった。サルミエント（アルゼンチン）、オストス（プエルトリコ）、ベリーヨ（ベネズエラ）が代表的だ。したがってダリーオもマルティも、国民国家形成期の流れのなかに置いて考えるべき作家たちである。二人は国外に出てヨーロッパやアメリカ合衆国を知ったコスモポリタンだった。ところがマシャードは国外はおろか、故郷リオ州を一度しか出なかつたらしい。

にもかかわらず、小説に限って見れば、『ドン・カズムツホ』と対応する同時代の相手を見つけられるのは、イスパノアメリカではなくヨーロッパや北米である。その時代のヨーロッパなら、マシャードと比肩してもよい作家がいる。スペインで言えばマシャードは国民作家クラリンやペレス・ガルドスと同世代

にあたり、とりわけ「姦通小説」としては、『ドン・カズムツホ』はクラリンの『ラ・レヘンタ』と照応する。北米ではホーソンの『緋文字』が対応する。

とはいえ、マシャードが世界的にその名を轟かせ、しかるべき評価を受けている作家かといえばそうではない。スーザン・ソクタグにはそれが許しがたい（ソクタグの文章が発表されたのは一九九〇年²⁾。彼女によれば、ヨーロッパ中心の世界文学観が支配していることが第一の障害であり、マシャードがイタリヤ人やロシア人、ポルトガル人であれば、このような事態は出来しなかつただろうという。第二の障害として、隣接するイスパノアメリカにおけるマシャードに対する冷遇を挙げる。彼女の見るところ、ブラジルの作家はイスパノアメリカの作家を強く意識しているのに対し、イスパノアメリカの作家はブラジルを「相当さげすみの眼で」眺めているというのである。そしてイスパノアメリカ文学がブラジル文学を無視している象徴的な事例として、ソクタグは「ボルヘスはマシャード・ジ・アシスを読んだことがないらしい」と総括するのだ。

果たしてそうなのだろうか。

キューバの文学研究者による「死後の遍歴——スペイン語のマシャード・ジ・アシス」という論考には、マシャードのスペイン語翻訳事情が詳細に述べられている³⁾。

この論考によれば、マシャード作品のスペイン語翻訳は、一九〇二年『プラス・クーバスの死後の回想』のウルグアイでの出版にさかのぼることができる。マシャードはまだ存命で、彼自身が「忠実かつ優美な」翻訳だと評価している。翻訳者は、ウルグアイの思想家ホセ・エンリケ・ロドーの周囲にいた人で

ある。ロドーはダリーオの紹介者でもあった。

このことから、ロドーもマシャードも、世紀の変わり目のアメリカ大陸の時代状況——米西戦争に勝利したアングロ・アメリカに対するラテン・アメリカの警戒が急速に高まった時期——のなかにいたことがわかる。ロドーの『アリエル』と『ドン・カズムツホ』は同じ一九〇〇年に出版され、マシャードの小説のなかには米西戦争への言及がある。

さて、スペイン語への翻訳は、その後スペインで進む。短篇集を翻訳・編纂したのはラファエル・カンシーノス・アセンスだ。聞き覚えのある人もいるだろう。ボルヘスが師と仰ぐスペインの文人である。カンシーノスによるマシャード翻訳が出たのが一九一九年。ボルヘスがスペインにいてカンシーノスと交流を深めていた時期と重なるのである。したがって、ボルヘスがマシャードを読まなかつたというソクタグの想像には小さな疑問符をつけておきたくなる。

それ以降マシャードの翻訳はしばしの空白期間を迎えるものの、一九四〇年ぐらゐから再開し、二十一世紀初頭の現在にいたるまで、アルゼンチン、メキシコ、スペイン、コロンビア、キューバ、エクアドルで翻訳に恵まれている。ソクタグは、『プラス・クーバスの死後の回想』がやっとスペイン語に翻訳されたのは一九六〇年代のこと、書かれてからおよそ八〇年後、英訳（二度）されてから一〇年後のことである」と言い切っているが、それは間違っている。

もちろん翻訳があるからといって、イスパノアメリカがブラジル文学を積極的に読んでいたとはいえない。マシャードにしても、長篇が中心に翻訳され、短篇作家としての側面はスペイ

ン語圏ではさほど知られていないという偏ったところもある。だがソンググの言うような「さげすみ」の目線がイスパノアメリカからブラジルに向けられているのかどうかは分からない。なぜそのような見方が出てきているのかも分からない。両者に支配—被支配の関係はないというのが筆者個人の感覚だ。

おそらくソンググのその見方に反応して、フェンテスは『ラ・マンチャのマシャード』という講演を行なった⁴。講演は一九九八年に行なわれ、講演録は二〇〇一年に出版されている。その講演でフェンテスは、マシャードを「十九世紀ラテンアメリカ文学の奇跡（強調引用者）」だと礼賛しているのである。フェンテスは小説の伝統を二つに分ける。セルバンテスの伝統とワテロウの伝統である。セルバンテスの伝統とはユーモアを重んじる系譜のことであり、後者はナポレオン・ボナパルトの個人への肯定力に端を発した現実主義的な系譜のことである。前者にはロレンス・スターンやデイドロが入り、後者にはバルザックやドストエフスキーなどが入れられる。

このようにしてフェンテスは『ブラス・クーバスの死後の回想』を、セルバンテスの伝統を踏まえたはじめてのラテンアメリカの小説だと言う。先に言ったように、十九世紀のイスパノアメリカは小説の空白期にあたるが、ブラジルにこそセルバンテスの後継が誕生していたというわけである。ソンググがブラジルとイスパノアメリカを切り分けていることには意味がなく、イスパノアメリカ+ブラジル=「ラテンアメリカ」というコンセプトで文学史を見ようとするのがフェンテスの立ち位置である。

マシャードの語りは機知に富んでいて清々しい。読み応えは

大変心地よい。主人公ベント・サンチアゴが神学校に入るときのエピソードはこう語られる。

数か月後、わたしは聖ヨゼフ神学校に入った。もし出発の前夜と当日の朝、わたしが流した涙の量を測ることができたら、アダムとイヴ以来に流されたすべての涙の総計を超えただろう。これはいささか大仰だ。だが、わたしをさいなむこの潔癖性を相殺するためには、誇張もたまにはいい。(百九十九頁)

カピトウとの結婚を語る章はこのようにはじまる。

さて、一気に幸せになろう。読者が待ちくたびれて自分のことを始め、どこかほかのところに遊びに行かないうちに、結婚することしよう。それは一八六五年三月のある午後のこと、ちなみに雨が降っていた。だが、新婚夫婦の愛の巣となったチジュカの丘の頂に着いたころには、天は雨を引っ込め、星を灯してくれた。すでに知られている星のみならず、幾世紀も先に発見されることになる星までも。(二六七頁)

マシャードの語りのなかにはその語りを映す鑑が備わっていて、そういう語りの相互作用から生まれてくる笑いがある。おそらくそれがフェンテスの好きな「批判」であり、セルバンテス的である。

『ドン・カズムツホ』の内容について深く書くと、一度目の読みの面白さを損なう恐れがあるので内容そのものに踏み込むことは難しい。ただ、語り主であるドン・カズムツホが「偏

屈男」という意味をもっていることから暗示されるとおり、一筋縄の解釈を許さないようになってきているということだけ指摘しおこう。先に引用したところも、一度目の読みと、二度目の読み以降とはまったく違った読み方ができる。

イスパノアメリカにはこのような小説はなかったのだろうか。十九世紀にはなかったのかもしれない。だが二十世紀ならガルシア＝マルケスの『予告された殺人の記録』がある。実はこの作品のキーパーソンは、『ドン・カズムツホ』と同じサンティアゴという名である。『ドン・カズムツホ』の語りのもつ両義性、そしてそこから導きだされる解釈を『予告された殺人の記録』に当てはめたらどうなるだろうか。とても興味深い読みが可能になるが、これは今後の課題である。

註

- 1 Rocca, Pablo, “En el 《Brasil de fuego》 (Encuentros y desencuentros: Rubén Darío y Machado de Assis)”, *Anales de Literatura Hispanoamericana*, 2006, 35, p.78. 46-5
- 2 ソンタグ、スーザン、「死後の生、マシャード・デ・アシス」、『書くこと、ロラン・バルトについて』（富山太佳夫訳）、みすず書房、二〇〇九年、四七—六一頁。
- 3 Domínguez, Carlos, Espinosa, “Andanzas póstumas: Machado de Assis en español”, *Caracol*, No.1, Sao Paulo, 2010, pp.64-85.
- 4 Fuentes, Carlos, *Machado de la Mancha*, Fondo de Cultura Económica, México, D.F., 2001.

(久野量一)